

平成13年度名古屋文理大学公開講座実施報告

—学生補助者導入の試み—

An Attempt of Student Assisting on Extension Course

田 近 一 郎, 本 多 一 彦
Ichiro TAJIKA, Kazuhiko HONDA

名古屋文理大学では市民を対象にしたコンピュータ操作の入門講座を毎年おこなっているが、本年度はじめて演習補助者として本学学生を採用した。この試みは、学生に「自らの知識の再確認」を促すだけでなく、「知っていることと、それを教えることの違い」を学びとってもらおうという教育効果をねらったものである。本論では公開講座に演習補助者として参加した学生が何を学んだかについて、講座終了後におこなったアンケートをもとに報告する。学生が我々の予想を越えて受講者と積極的に関わり合い、それを通して「教えること」の何たるかを深く認識してゆく様子が明らかになった。さらに近年大きく変貌しつつある高等教育において、とりわけ注目されている生涯教育にどのように取り組むべきかについても、学生におこなったアンケートからヒントを得た。

キーワード：公開講座，ティーチングアシスタント
extension course, teaching assistant

1. はじめに

名古屋文理大学では短期大学時代の平成9年度より市民を対象にしたコンピュータ操作の入門講座を毎年おこなってきている。平成13年度は文部科学省主催のIT講習会が全国で開催され、本学でも社会への大学の貢献を考慮し、会場、講師を提供した上で8月1～3日の3日間のべ12時間にわたり講習会を実施した。しかし、このIT講習会は全国一律の内容の講座であり、本学でつちかってきた公開講座の経験を十分生かせないことも予想された。そこでIT講習受講者のさらなるスキルアップを支援するためIT講習フォローアップコース（講座名：完全マスター！ワープロ&インターネット、以下では公開講座と呼ぶ。）を9月1日、8日の両日に実施した。本講座の内容は従来の公開講座の経験を踏まえたものとなっていたが、講座の内容以外の新しい試みとして、演習補助者として学生を採用した

ことが挙げられる。これは本学カリキュラムの必修科目「情報リテラシーⅠ、Ⅱ」において平成12年度からおこなっている上級生による下級生への支援制度（TA：Teaching Assistant）の公開講座へのはじめての活用である。このTA制度の導入は、十分な数の補助者を動員できるといった公開講座運営上の利点に加えて、本学学生が一般社会人と接点を持ち、かつ大学で学んできたコンピュータに関する知識を逆に教えるといった貴重な経験を提供するものであった。そこで、パソコン公開講座に参加したTAの学生が何を感じ何を学び取ったかを学生におこなったアンケートをもとに報告する。

2. 公開講座の実施とTA学生の運用について

平成13年度の公開講座は9月1日（土）、8日（土）の2日間実施された。両日とも午前10時から12時、午後

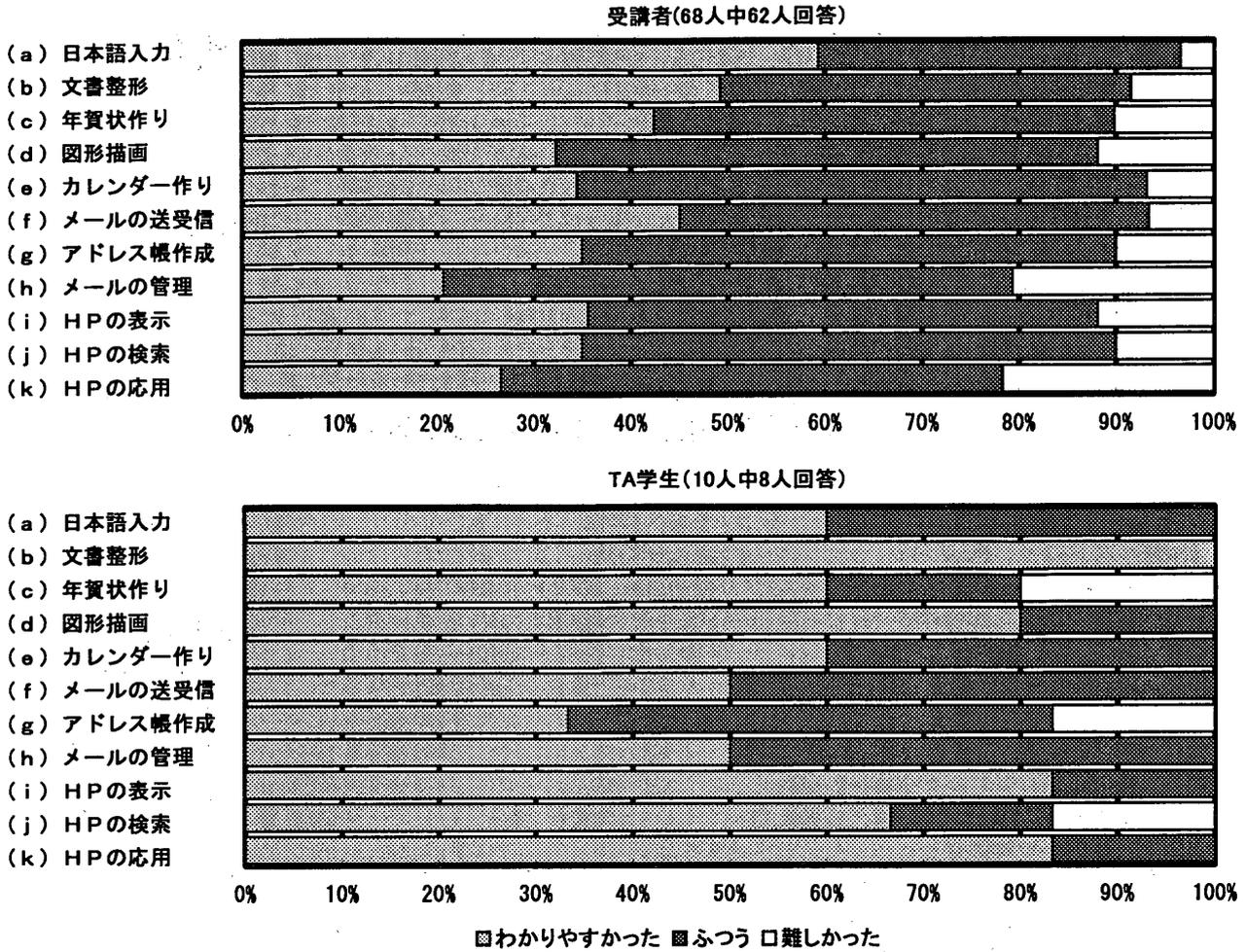


図1. 受講者, TA 学生の講座内容別理解度 (単位: %)

1時から3時までの実施でのべ8時間の講習である。

TA 学生の配置に関しては、公開講座の受講申込者が70名であったため本学設備の都合からパソコン実習室(1教室あたりパソコン36台、プリンタ4台)を2教室用意して各35人の2クラス制とし、それぞれのクラスに9月1日、8日の両日ともTA 学生を4人および3人配置した。なお、のべ14人必要なTA に対しては「情報リテラシーI, II」で既にTA を経験している学生6人に主にコンピュータを扱う専門演習ゼミからの学生4人を合わせ計10人の学生で対処した。内訳は9月1日のみの担当が3人、9月8日のみの担当が3人、両日担当が4人である。

9月1日、8日の講習内容はそれぞれ以下の通りである。

公開講座スケジュール

9月1日 ワードプロセッサによる文書作成

- (a) 日本語のローマ字入力
- (b) 文字の修飾と文書整形
- (c) 年賀状・クリスマスカードの作成と印刷
- (d) 図形の描画とワードアートによる飾り文字
- (e) カレンダー作り (作表を含む)

9月8日 電子メールの利用とインターネット

- (f) 電子メールの送信・受信
- (g) アドレス帳作成・同報メールのための操作
- (h) ファイルの添付方法・メールの管理
- (i) ホームページの表示のための操作
- (j) ホームページの検索
- (k) ホームページの登録・グリーティングメールの送り方

3. アンケート結果

この章では、TA 学生へのアンケート結果を

- (1) 自らの知識の再確認
- (2) 知っていることとそれを教えることの違い
- (3) 学生と社会人のかかわりあい
- (4) 将来の高等教育機関のありかたについて

の4つの視点から分析しTA 経験から学生が何を学んだのかを考察する。アンケートは公開講座終了後、受講者、TA 学生それぞれに対して実施し、受講者68人のうち62人から、TA 学生10人のうち8人から回答を得た。

3. 1. 自らの知識の再確認

ここでは、TA 学生の講座内容に関する習熟度について簡単に触れる。

TA 学生を採用するにあたっては、一般人を相手にしたTA 活動をなんなくこなせることを念頭に、既にTA を経験している、あるいはゼミ・授業で積極的にコミュニケーションを図る等の意欲ある学生らに参加を呼びかけた。その結果、呼びかけた学生の全員がそれに応えてくれた。望みうる限りほぼ最適な人選をできたと思う。

このような学生ならば講座内容に関する習熟度について全く問題ないものと考えられる。というのも、公開講座の内容(2. 参照)は既に履修済みの1年次科目「情報リテラシーI」で学んだことがらの範囲内であり、TA 担当日の数日前には講座で使用する教材で講座内容を予習していたからである。実際、アンケートによると「事前の準備は充分であったか」の間には8人中5人が「充分」3人が「適当」と答えている。また、講座内容ごとの理解度(図1)についても、受講者では、後半の内容ほど理解度の低下がはげしいという初心者には典型的な傾向が見られるのに対し、TA 学生(熟練者)ではそのような傾向はなく「難しい」という回答のあった内容も一部にとどまった。これらからTA 学生は自らの講座内容に関する習熟度を高く自己評価していることがわかる。

3. 2. 知っていることと、それを教えることの違い

あることがらについてその内容を(表面上は)理解していることと、人にそれをわかりやすい言葉で手短かに説明できることとの間には大きな差がある。ひっきりなしに出される受講者からの質問に答えなければならないTA 学生もこれについては強く意識したものと予想される。以下では、TA 学生が持てる知識を使っ

てどのように受講者の質問に対処し、それを通して教えることへの考えを深めたかをアンケート結果から探ってみたい。なお、アンケート結果の詳細は省くが、講座時間内に受講者から出された質問のほとんどは、キーボードによる入力法・GUIの使い方・マウス操作の仕方などパソコンの操作に関するもので、聞きそびれや誤った操作で望ましい状態にならない場合に発せられたことを記しておく。

最初にTA 学生の受講者への対処の仕方をみてゆく。「自分が理解していると思っている内容を受講者にうまく説明できたか否か二者択一で答えよ」との間には8人中7人が「はい」と答えており、理解していることがらを教える限りではうまくいったと自己評価している。実際に、どのように対処したかをもう少し詳しくみるために、講座内容(2. 参照)ごとに出した質問: 「受講者から出された質問は」、「それへの対処の仕方は」、「受講者の反応はどうであったか」への回答(自由記述)と「自分の理解が充分でない内容について質問を受けたときどのように答えたか」への回答(自由記述)を以下にまとめた。

●大半の質問はTA 学生が理解している内容に関するもので、これらに対しては、受講者の誤った操作の指摘とそれへの対処法を口頭による説明のみで、あるいは正しい操作を実演しつつ説明することで、受講者に理解してもらい、正しい操作をおこなわせることができた。ブラウザでのページ登録を「紙に付箋紙をつけて見つけやすくする」と説明する、フォルダを書類入れにたとえる等、わかりにくいパソコン操作を受講者にもなじみのある日常のものごとに結び付けて説明するなどの工夫をした学生もいたようだ。また、とりあえず説明したが受講者にすぐには理解してもらえなかったもので、より簡単なことばではっきり説明するべきであったとの反省も聞かれた。

●一部の質問はTA 学生も充分理解していない内容に関するものであったが、これらに対しては、講師の操作方法とは異なる学生自らが思い付いた操作方法を説明する、他のTA 学生に質問の解答を教えてもらいあらためて受講者に説明する等、臨機応変に対処した学生が少なからずいた。説明できなかったのでやむを得ず受講者の代わりに操作をおこなったという回答は1件にとどまった。実際、講師を担当した著者の一人の観察ではこのようなケースはきわめて少なかったよう

に思う。

以上からは TA 学生ができるかぎり説明により受講者の理解を引き出そうと試み、同時に受講者とのコミュニケーションを図ろうと努めている姿勢が強くなるかがある。

さて、TA 学生はこのような経験から教えることについて何を考え、学んだのだろうか。それを「これから授業を受けるに当たり、この TA の経験はどう役立つと思うか」との問に対する回答（自由記述）からみてゆく。

これは予想通りであったが、半数の学生が「人に教えることの難しさを感じた」、「自分の理解のあいまいなところが見えてくる」、「知ったかぶりをしないよう気をつけたい」などのように知っていることと教えることとの違いを認識させられたと率直に回答した。また、TA 活動を「初心者に教える場合、つまづきそうなところをあらかじめ予想できるのでうまく対処できる」と教える技術の向上の機会ととらえるもの(2人)、さらには、TA 活動を単に教えるということに限定せず、広くコミュニケーションの一種であるとの見方に立ち、「他人とのコミュニケーションスキルの向上につながるものだ」ととらえる学生もいた。

3. 3. 学生と社会人のかかわりあい

TA 学生と受講者の間にはどのようなコミュニケーションが成り立っていたのであろうか。TA 学生から受講者へのコミュニケーションを図ろうとする積極的な姿勢については3. 2. で見たとおりである。

それでは、受講者から TA 学生へのコミュニケーションについてはどうであろうか。TA 学生へのアンケートの質問:「情報リテラシー I を受講していた諸君と今回講座に参加した受講者の違いについて、受講態度、質問の仕方、質問の内容の3点に関して答えよ」への回答(自由記述)からは以下のようなことがわかった。

受講者の受講態度については、(当然のことながら)学生に比べて受講者は「非常に真剣」、「とても積極的である」とすべての学生が回答している。TA 学生はいずれもこれまで社会人対象の講座等で TA を経験したことの少ないものばかりであったので、自ら学ぶために来た受講者の熱意やひたむきさに初めて接してかなり驚いたことであろう。

受講者の質問の仕方に関しては複数の TA 経験のある学生から「問題が起きたとき、本学学生は単に「わ

からない」と言うのみで対処のしようがないが、受講者は「こうしたらこうなってしまった。どうしたらよいのか」という質問の仕方なので対処(筋道を立てて説明)しやすい」という回答を得た。また、「学生とは異なり問題が生じたときにはすぐに質問する」、「学生よりはるかに質問回数が多い」、「丁寧に質問する」等の傾向を指摘する学生も多数いた。(残念ながら一部の特定の受講者は「年上のためかひどい態度をとる」、「横柄に質問する」ことがあったようだ。)これらから受講者が TA に積極的に節度ある態度で話しかけていることがうかがえる。実際、受講者へのアンケートでは「わからないことがあったとき TA にすぐに質問できたか」との問いに62人中58人が「はい」と答えている。同アンケートの自由記入欄でも18人が「TA の態度がよい」、「TA によく答えてもらった」等の回答をしており、「分かりにくかった」等の否定的なコメントは1件もなかった。

以上から TA 学生と受講者との間に一方通行でない教え教えられる関係が築かれていたと言えると思う。TA 学生自身もそれをよく認識しており、全ての学生が「理解してもらおうとこちらもうれしい」、「やりがいがあつた」等の感想を述べている。「来年も TA をやりたいですか」との問にも全員が「はい」と答えている。

3. 4. 将来の高等教育機関のありかたについて

入学学生の多様化、18歳人口の減少等、大学をとりまく環境は厳しい。この状況を乗りきる手だての一つとして従来のように若い世代だけからでなく、さまざまな年齢、経験を持つ勉学意欲旺盛な社会人を学生として広く受け入れることが議論されることも多い。今回の TA 活動で、教育の場での一般社会人とのコミュニケーションを実体験した学生は、幅広い層の社会人と共に学ぶことについて何らかの具体的なイメージをいっていることであろう。ここでは、それをアンケートの質問:「もし大学が諸君のような若い世代の人達だけが学ぶのではなく、講座受講者のようなさまざまな年齢、経験を持つ人達と共に学ぶ場所となったらどのように思うか」への回答(自由記述)からみてゆく。

5人の学生からは「経験豊富な人から多くのことが学べると思う」、「大学は年齢に関係なく学ぶところなので全く違和感はない」、「多様な人々に交じって勉強することは何かしらよい経験になる」などの肯定的な感想を得た。また、「(演習は)進度に差がつきやすいので世代別、進度別のクラス編成になるかもしれない」、

「できる人は物足りないと思うかもしれない」等と演習を運営する上で生じるであろう問題点を指摘する学生（3人）もいた。もともとこの質問は、若者と年配者が共通の場で演習に限らず広い意味で講義を受けることへの回答を意図したものであったが、学生は若者と年配者が同じ教室で演習を受けることを考え、このような回答をしたようだ。

4. おわりに

以上のように公開講座へのTA制度の活用は成功裡に終わった。今年度はTAをこなせる意欲ある学生を十分な数確保できたからこの結果は当然であろう。しかしながら、入学学生の学力に関する経年データはないものの、今回のレベルの学生を今後も継続して多人数確保できるか否か、見通しは決して明るいものとは言えない。せつかくのこの試みを持続してゆくためには、今年度は実施する必要はなかったが、TA活動のための特別授業などの補強対策をおこなう必要も出てくるであろう。もちろん、意欲ある学生が数多く入学することが根本的な解決になることは言うまでもない。

最後に、講座補助の依頼を快諾してくれた以下10名の学生諸君に謝意を表して本論を終える。

情報文化学科3年生

本間 義将
井口 靖
栗木 慎介
柴田 啓介
羽田野英吾
浅井 恵一
加藤 貴春
林 慎一郎
山下 亮介

社会情報学科3年生

高田 峰之